

受験番号

2024 年度 一般選抜 I 期 入学試験問題

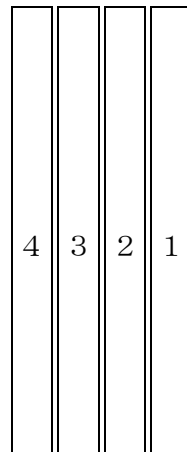
国 語 (50 分)

注 意 事 項

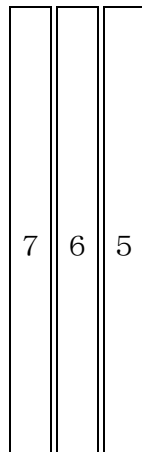
- 「始め」の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- この問題冊子は全部で 8 ページです。印刷不鮮明などの箇所があった場合は申し出てください。
- 答えは解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 使用する問題冊子と解答用紙の指定欄に**受験番号**（数字）を必ず記入してください。
- 解答作業には必ず**黒の鉛筆**（HB 以上）または**シャープペンシル**を使用し、ボールペンや色鉛筆などを使ってはいけません。
- 試験終了後に、解答用紙、次に**問題冊子**を回収します。問題冊子の余白や裏面は、**下書きに使用してもかまいません**。
解答用紙は破ったり、汚したりしないでください。
- 「やめ」の合図で、すぐに筆記用具を置き、静かに待っててください。

一 次の文章は中村明の『日本語の美―書くヒント』の一部です。但し設問の都合上、一部改変してあります。これを読んで以下の問に答えなさい。

いい文章はそれを読む者に①充実した時間をつくり出す。知識が人を喜ばせる必要はない。技巧が人を楽しませる必要はない。人を②利口に、快く酔わせるよりも、それを読んで本当によかったと思わせる文章を書こう。



このようにして、世の中にはいろいろな文章が現れる。どちらがどれだけすぐれているかという比較のできない、文体という質的な違いを有する多数の文章が存在する。が、いかに個性的な名文であっても、それがいい文章である限りは必ず備わっている表現上の共通点がある。それは③明晰な通達性である。読む人にわかってもらえなければ、その文章の価値は生かない。通じない文章が人を感動させるはずはないからである。



すぐれた内容を④正確にわかりやすく表現する、それがいい文章を書く基本である。この基本がしっかりと身についたら、次にもう一歩進んで、表現を豊かにし、文章に深みを加えるように心がけたい。ことばをみかくのである。

A 一方、どれほどすぐれた⑤思考内容が頭のなかにあつたとしても、それが直接人の心を打つことはできない。というよりも、言語の形をとることによって、それがすぐれた思考であることがはじめて確認できるのである。その意味で、文章表現は半ば発見であり、半ば創造である。いい内容がよい表現の形で実現し、いい文章になる。

B したがって、どのような文章を書く場合でも、人にわかるように表現することが大切である。間違いなく相手に伝わるように、次の二点に注意して書くようにしたい。一つは、正確に表現することである。不正確な文章では内容が不正確に伝わりやすいからだ。この場合の「正確」という意味は、表現内容を間違いなく言語化することを指し、必ずしも情報が高い⑥精度で再現されることにはならない。

C それではいい表現はどのようにして生まれるのだろうか。それはまず、⑦観念とも感情ともつかぬ不定の何かに突き上げられるという内面的な⑧切迫感を伴わなければならない。そのような芸術的衝動ある言語形式に自動的に定着するわけではない。そこには文章体験・執筆動機・作品意図・表現対象・伝達相手といったさまざまなものがからむ。文章表現が個人の主体的な行為でありうるのはそのためである。

D 例えば、約一週間の旅行について書くとする。その旅行期間も、事実を⑨厳密に記すなら、何日何時間何分何秒となるはずだ。しかし、必ずしもそう書いた文章だけが、正確だとは言えない。「一週間ほど」「一週間近く」「一週間あまり」、あるいは「一週間にも及ぶ」「わずかに一週間にすぎない」などの言いまわしが自分のそのときの気持ちを最も適切に表すか、というレベルでも『正確さ』である。単に「一週間」といった、情報的にはかなり不正確な言い方が、時には最も正確な表現になりうる。

E どれほど凝った⑩多彩な表現が繰り広げられても、その奥にある内容がつまらなければ、文章全体として価値が低い。それでは、いい内容はどのようにして生まれるのだろうか。すぐれた内容を生み出す特定の手段のようなものは考えられない。⑪小手先の技術といったものは役に立たない。自己を取り巻いて果てしなく広がる世界のどこをどう切り取るか、それをどこまでよく見、よく考え、よく味わうか、そういうほとんどその人間の生き方とも言えるものがそこにかかわっているからである。豊かな内容は深く生きることとおして自然に湧き出るのだろうか。

F 文章にとって何よりも大事なのは、すぐれた内容としてそのまま相手に伝わることである。したがって、いい文章には「いい内容」と「いい表現」という二つの⑫側面がある。

G もう一つは、わかりやすく書くことである。たとい正確に表現されていても、それがわかりにくい文章であれば相手は⑬真意を理解できなかったり⑭誤解したりする危険が大きいからだ。

問一 文章中の空欄1～7には文章A～Gが入ります。最も適する順番に並び替えて、そのうち空欄2・4・7に入るものを記号で答えなさい。

問二 文章中の傍線部①～⑭の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

- | | | | | | | |
|-------|------|------|-------|--------|------|------|
| ① 充実 | ② 利口 | ③ 明晰 | ④ 正確 | ⑤ 思考内容 | ⑥ 精度 | ⑦ 観念 |
| ⑧ 切迫感 | ⑨ 厳密 | ⑩ 多彩 | ⑪ 小手先 | ⑫ 側面 | ⑬ 真意 | ⑭ 誤解 |

問三 次の文は文章A～Gのいずれかの直後に入ります。どの文章の直後に入れるのが最も適切か記号で答えなさい。

逆に言えば、すぐれたことばの姿をとおしてしか、すぐれた内容というものを知ることはできないのである。

二

次の文章は平松洋子の『なつかしいひと』の一節です。但し、設問の都合上一部改変してあります。これを読んで以下の問に答えなさい。

時計の針が夕刻六時四十五分をさすと、決まって耳に忍びこんでくる①音色がある。近所の家で、だれかがバイオリンの②稽古をはじめめるのだ。

毎日繰り返し聴いているのに、曲の③ダイメイはわからない。ひとつずつ音符を拾いながらたしかめるようにならざる短調の④調べが、初心者のつたなさとあいまってA寂しげに届く。

このごろは、日暮れると、細く開けた窓から⑤シュウレイがそぞろに忍びこんでくるようになった。閉めようかとも思うけれど、夕刻の音色を聴きはじめてからつい耳を澄ませるようになり、そのままにしてしまう。

だんだんやるせなくなってくる。音は響いてくるのに、音楽をかなでるたのしみやよろこびが薄い。遠慮がちに闇を震わせる⑥タンチョウな音色には、こわばりの気配さえ蠢いているのだった。

いつつけられて、しづしづ稽古をおこなっているのだろうか。それとも、それにしても、これにしてはこのかたずくと定刻に、きまじめなことだ。

いや、律儀な音色を素直に聴けないのは、すっかり日が落ちるのがはやくなつたせいかもしれないと思ひ直す。来る冬構えをせかされているようで、みように⑦おぼつかない、そんな心もとなさをひとり勝手に抱えこむ。

ただの稽古の音色だというのに、ともすると⑧カジョウな感情をふくらませるのは、こどものころのピアノの稽古をつねとして夕刻を過ぎたからだ、と納得をとりつける。

四歳からピアノを習いはじめ、十五まで毎日稽古をかかさず暮らした。とはいえ、稽古を持って余したわたしは、途中でピアノを辞めてしまった。稽古がすきな者などいないとしじゅう小言をいわれたが、わたしにとってピアノのたのしみは稽古の積み重ねのうえでの⑨習熟ではなく、けつきよくのところ気ままに弾くことにあった。だから、たいして上達しないのもとうぜんのことだった。

辞めて以来三年間、つまり高校時代は、のちに音楽大学に進んだ妹が二、三時間、いくつかの練習曲の稽古に励むのを聴きながら夕刻を過ぎた。

指の運びがつかえて調子が乱れる箇所は、ひとつ屋根の下でおなじ時間に耳にする母とわたしにはおのずとわかった。その箇所が近づくと、針しごとをする母の気配にBかすかな緊張が混じるのを察知した。そして難所をぶじに越えればピアノの音色がよろこび、母が一瞬まどった硬さもふつと⑩シカンするのだった。

そんなふうだったから、日常の時間のなかでおこなわれる稽古の音色には、その日ごとの微妙な感情の起伏がいやおうなく映しだされることに、わたしはだんだん気づくようになっていった。

だから、稽古の音色には⑤通奏低音のように流れているべつの音色があり、つまり、隠された正体に勘ついて揺さぶられてしまうのだ。

ときおり、バイオリンの音が届かない夕刻がある。とくに待っているわけではないのに、おや六時四十五分を過ぎてしまった、と⑥訝しむ。しかしそのまま日常に紛れて忘れてしまうのだが、翌日ふたたび弦のつたない音色が響けば、「あ、はじまった」。⑦耳をそばだてる。

そのうち稽古の音色は、かならずびったり七時十五分にやみ、とりたてて⑧余韻も残さず闇のなかにきえてうせる。

問一 文章中の傍線部①～⑩をカタカナなら漢字に直し、漢字ならその読みを平仮名で楷書で書きなさい。

問二 文章中の傍線部(ア)～(エ)の本文中での意味として最も適するものをア～オの中から選び、記号で答えなさい。

⑦ そぞろに

- ア ゆっくりと
- イ さつさと
- ウ 淋しげに
- エ 何となく
- オ 軽やかに

イ おぼつかない

- ア 気が動転する
- イ 気が散っている
- ウ 忘れている
- エ あやふやである
- オ 悲しい

ウ 通奏低音

- ア 曲全体が短調の調べであること
- イ 華やかにあざやかに目立つもの
- ウ 一曲分をじっくり演奏し尽くすこと
- エ 目立たずに影響を与え続けるもの
- オ 周囲に響き渡る低音であること

エ 訝しむ

- ア 残念に思う
- イ 気づいて慌てる
- ウ 不審に思う
- エ 名残惜しむ
- オ ふと思い出す

問三 文章中の傍線部A「寂しげに届く」とありますが、それはどうしてですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

- ア バイオリンの稽古の音色からこどもの頃のわたしの稽古風景を思い出し、その頃からの失われた時間が物淋しく感じてしまうから。
- イ 稽古が始まる時刻がわかっていて、毎日聞いているにもかかわらず、演奏している人も曲の題名もわからないから、わたしが愚かに感じてしまうから。
- ウ 暗くなりつつあり一日が終わろうとしている夕暮れ時に、つたない単純な音色で短調の曲を聴いているから。
- エ いつも決まった時刻に稽古が始まるのに、稽古をしている人は一人でバイオリンを演奏しているので、友だちがいないのだと感じてしまうから。
- オ バイオリンの稽古の音色から、子どもの頃の賑やかな家族を思い出し、一人暮らしの自分自身生活に人恋しさを感じてしまうから。

問四 文章中の傍線部B「かすかな緊張」とありますが、これを文章中では別の言葉で表現しています。最も適切な六字以上十字以下の表現を文章中から抜き出して書きなさい。

問五 文章中の傍線部C「耳をそばだてる」とありますが、そのようになるのは端的にどうしてですか。次のア～オの中から最も適するものを選び、記号で答えなさい。

- ア 音色が寂しげだから。
- イ だんだんやるせなくなってくるから。
- ウ みようにおぼつかないから。
- エ 心が揺さぶられるから。
- オ 前日に訝しんだから。